

Title	<批評・紹介>板野長八著「中國古代社會思想史の研究」
Author(s)	柴田, 昇
Citation	東洋史研究 (2001), 59(4): 778-785
Issue Date	2001-03-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/155363
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

批評・紹介

板野長八著

中國古代社會思想史の研究

柴田 昇

一

本書は故板野長八氏の、『中國古代における人間觀の展開』（岩波書店、一九七二）、『儒教成立史の研究』（岩波書店、一九九五）に續く三冊目の著書であり、著者没後に好並隆司・寺地遼の兩氏によって生前の諸論文の内で社會思想史に關わる作品を選擇・配列して編まれたものである。最初に本書の目次を各論文の初出年とともに提示しておく。

老子の無（一九四九）

荀子の思想―特に天人の分について―（一九四六）

荀子の禮説―儒教成立の前提として―（一九四七）

秦誓の作成（一九八二）

管仲の參國伍鄙の制を論じて商鞅の縣の制に及ぶ（一九八三）

商鞅の變法を繞る老子と孟子（一九八四）

中國古代の帝王思想―特に韓非の君主論―（一九五二）

戰國秦漢における孝の二重性（一九六七）

司馬遷の經濟思想（一九五一）

戰後間もない時期から八〇年代の半ばまで、四十年近くの間に發表された九本の論文から本書は成っている。寺地遼氏の「あとがき」によれば、板野氏は新しい中國古代思想史の概説書の執筆を構想しておられ、そのためにはあと數篇の論文をまとめなければならぬと常々述べておられたとのこと。そのような意味では、本書は、なにがしかの未完成な部分をもった書だということになるのであろう。しかし、そこに示されている思索の跡は、四十年という長い發表時期の幅を感じさせない、全體としてはきわめて強靱な一貫性と體系性を有するものとなっている。

とはいえ、基礎的な發想は一貫しているとしても、各論文に示された關心の所在については若干の變化が感じられるのも確かである。とくに八〇年代に發表された三篇にはそのことを強く感じさせられる。以下本稿では、著者の力點の變化にも留意しつつ、編者の意圖には十分に沿えないかもしれないが、發表年順に各論文を紹介・論評してゆきたい。

二

「荀子の思想―特に天人の分について―」によれば、荀子は天人の分を主張して人間を天の支配から脱せしめた。それにより人間は天から解放され、天に對する人間の領域と自主性・責任が自覺され、人間の道德とこれを説く聖人の教とが確立された。ただし、ここで言う人間は聖人君主のことを意味し、天から完全に解放される人間は聖人君主のみである。また聖人も天に對して優位に立つわけではなく、天と並ぶ者に過ぎない。そして一般の人々は聖人の完全な支配下に置かれ、天の支配力もこの聖人を通じて人間界に及ぶべ

きものとされた。このような荀子の思想は、思想的には孟子・莊子の見解を老子的見解により批判修正して聖人一人の人間界を樹立しようとしたものであり、社會的には封建諸勢力の整理統合による中央集權の專制君主の出現と、それに並行して進行した專制君主の始祖・天による舊勢力の始祖・天の統合を背景としていた。その結果天の子・子孫として天に直接結びつくことができるのは君主のみとなった。荀子が構想したのは、天との直接的關係を獨占する、人間界における唯一の自由な人間としての聖人君主が、獨自性を有する勢力の介在を許すことなく、人間界全體を統率する世界であった。

「荀子の禮説——儒教成立の前提として——」は前稿の分析を「禮」を主題としてさらに進める。禮とは王者の下にあらゆる存在を位置附けるものである。禮の下にある萬物は、互いに衝突することなく、禮によって與えられた分の中で各々の能力・役割を完遂すべきものとされる。「天人の分」もこのような見解と密接に結びついており、それは人の分を越えて天に期待することの非を説くものであって、人の天に對する優越性はそこから見出し得ない。むしろ荀子は天命の信奉者という面を持ち、天・性と對立する偽の核としての禮は、實は天の命・天の理法に準據するものでもあった。このような禮を構成原理とする世界は、一者としての道ないし聖人王者の下に、禮による秩序を基準として多者が配列される世界である。そして多者とは一者より分化したものであり、この世界の變化發展は一者なる統一體の自己分裂として理解される。このような思想は、時間的にはあらゆる變化を容認しつつ傳統を溫存するものとなり、空間的には他民族他國家を包容する中華思想へ展開するものとなる。

以上のような荀子の立場と深く關わり、本書に收録された諸論文の考察の要とも言える位置に存在するのが老子の思想である。「老子の無」では老子の道の觀念は聖人王者の絕對性を理由附けるものとして把握される。老子の思想の特徴の一つに人爲否定があるが、それは人間の後天性を排除して先天性・自然性に復歸し道に一致すること、即ち天・道に對する人間の自主性・自立性の否定を意味した。これに對し聖人王者は道を知り操縱する者であり、聖人の無爲は、民が自ずから化し聖人に歸一することによって聖人が民に對する絕對性を獲得するための手段なのであった。老子が理想としたのは、被支配者が本來的に何らの獨自性・特權を有さないが故に、實態においては支配を受けながらもそれを當然とする状態である。そしてそのような老子の思想は、郡縣制度に基づくところの中國の專制政治の理論の一つであったと結論される。

以上の三論文については、とくに「老子の無」については、近年の史料狀況の變化もあり、現状では異論を持つ向きもあるだろう。しかし著者の老子・荀子の思想に對する構造的分析は、強固な一貫性を持ち、現在でも思想内容の分析における出發點の一つとしての意味を失っていないように思われる。

三

「中國古代の帝王思想——特に韓非の君主論——」は、本書の九〇頁近くを占める大作である。韓非は、君臣關係を官爵を介した計數實買の關係と考えた。臣下が君主のために盡力するのは代價として賞||爵祿を得るためであり、君主が賞を與えるのは臣下の業績に對する當然の代價にすぎない。ただし君權は官僚機構を通じて上から下

へ貫通すべきものであり、臣下相互が私的にこの賣買を行うことは許されない。君主と庶民の關係については、庶民は一個の團體を形成し、團體員自らが警察事務と連帶責任を負うことで團體が全體として君主の支配の對象となった。民の世界の秩序は、舊來の地縁・血縁團體を單位として連座密告方式の下に庶民の自治に委ねられた。故に韓非の構想した國家體制は、封建制度下のそれと本質的には異なるものではない。宗族制を維持しつつ地縁・血縁團體の内部的な親和性・團結性を破壊し、それを絶對的に再編成したものとみるべきである。このことは君臣關係においても同様で、韓非は、孝悌・宗族・封建貴族等を否定したのではなく、それらを君主に隸屬させ政治的特權を剝脱するに止まったのである。

上述の如き官民を統治する韓非の手段は法と術に代表される。法とは君主の命令・成文法であり、官民のともに遵守すべき規範であつて、公平無私の適用が要請される。法の裏付けとしての賞罰を以て人に臨むことは人の本性に根據を持ち、故に人は信賞必罰が實行されればされるほどますます努力し、死力を盡くす。その結果、利害の對立にもかかわらず臣下は君主のために盡力し、ここに法一元・君主一元の體制が實現する。また術とは官民を法に準據させ法の目的を實現させるための手段であり、参伍の法・形名参同をその實體とする。参伍の法を行ひ形名参同を求めることで君主は事物の真相・成否を知り、それらの結果に對する信賞必罰の實行により君主は作爲することなく完全支配を實現し、他から制されることのない存在たり得るのである。また韓非は、君主・官吏の他に、君主に道を説き一體となつて物事を處理し、時には君主の身代わりになる「法術の士」を設定する。法術の士は法術を行ひのに十分な能力

を有するが、勢を缺くため君主たり得ない。勢は、勢を得る理が道によつて定められた人のみに得られる宿命論的なものである。韓非によれば、君主は自身の精神・徳を充實し虚・静となつて道に服従することで道を體得し、また道の代行者たる君主によつて操作される法は道の人間界への表れであり、術は道の働きを人間界に實現したものである。官民は、道の代行者たる、勢の保有者としての君主に、萬物が道に對するが如く對し、君主の法に服して君主の術に完全に操縱されるのである。

このような韓非の思想の歴史的位置について、板野氏は王道と霸道の二系列の對立によつて古代思想の流れを把握し、韓非を君權強化を基調とする霸道の系列に置き、統治方法たる法術を老莊等の理論によつて基礎付けそれを始皇帝の前に捧げた者とする。ただし王道と霸道の間には絶對的な質的差異は認め難い。孔子・孟子・荀子らの王道的・封建制度の世界は、墨子・老子・莊子らの霸道的・郡縣制度の世界に徐々に壓倒されてゆくが、それは質的變化ではなく、宗族・卿大夫の自主性の減少・消滅という量的な變化である。霸道の立場、そしてその一歸結たる韓非の立場において成し遂げられたのは、「禮的世界の絶對主義の方向への再編成であつて、そこには社會上政治上の變動はあつても革命はなかつた」。

以上、板野氏は、韓非において君主とその他の人間との關係が道と萬物の關係として理論化される様を明晰に論じた。また古代思想の全體像に關しても、王道・霸道の二系統への類型化には止まらずそれらに通底する封建制・宗族制的な枠組みの存在を指摘した。春秋戰國の動亂から秦漢統一帝國への歴史的過程は、中國史上最大の社會變動を伴つたと考えられることが多く、それ以前の分權的・封

建の體制が解體・崩壊し、中央集權的・專制的體制に轉換を遂げたものとイメージされてきた。戰國秦漢期に出現する新しい國家は、先行する族的秩序からの切斷を要件とし、それこそが國家支配の革新的性格を示すものと理解されてきたのである。このような理解は板野氏においても基本的には同様だが、しかし氏によれば少なくとも思想のレベルにおいてはその變化とは量的なものであって、新しく生まれてくる專制國家も、その根底には舊來の族的秩序の枠組みを抱えこんでいたとされる。八〇年代以降の一つの研究傾向として、春秋・戰國の交、及び秦帝國の成立を、それぞれ傳統性・繼續性の面から再検討しようとする流れがあるが、板野氏の立場はそのような研究動向に引き附けて理解することも可能なのではないか。

「司馬遷の經濟思想」では、王道・霸道が漢代において交わり協調した姿が描かれる。司馬遷の經濟思想の根本的態度は、營利活動と道德・禮との兩立である。司馬遷は經濟活動・營利活動を人間に備わる自然の性情に基づくものと考えた。そして經濟活動に對應する具體的方法として、輕重の法（流通を制御し物價の高低を調節すること）を支持し、またその原理として因の觀念（對象物の自然に因ること）でその對象を完全に支配する）を提出した。ただし管仲の輕重の法が制御面を重視するのに對して、司馬遷は民の經濟・營利活動には干渉しない立場をとった。このような立場は、『鹽鐵論』の文學と大夫の中間に位置する。即ち、大夫は營利活動と禮を關連させず輕重の制御面を重視し、文學は禮を守ることを言いつつ管仲を非難したが、司馬遷はその中間の位置で、營利活動と禮を平行するものとし、民の營利活動に對し放任的な立場をとった。ここに禮と營利活動との妥協、王道（儒家）と霸道（法家）の協調が見られる。

以上の司馬遷の立場はその史觀と深く関わっている。司馬遷は人間界のあらゆる存在は天命に連なるものと考え、經濟の動きも自然の道の姿として肯定したのである。このような司馬遷の經濟思想は、欲望や營利活動を天命によって規定されたものととらえ、民間經濟活動の自由は君主がそれを默認して人間の性情に従う所に成り立つと見るものであり、自由主義的な思想と定義することは不可能である。

本論文でも司馬遷の經濟思想に見える一見自由主義的な要素が、實は君主權力の枠内での限定的な自由にすぎないことが指摘されており興味深い。霸道の系譜に一面連なる思想が一見自由主義的な外觀を呈するという議論は、近年の出土史料等の分析の際にも示唆を與えるように思われる。

「戰國秦漢における孝の二重性」は、「孝」觀念の性格變化から戰國秦漢期の社會變動の性格を論じた力篇である。

最初に孟子と老子の比較がなされる。封建勢力の代辯者たる孟子の主張した孝悌が宗族を支える徳であったのに對し、儒家、特に孟子への批判者として現れた老子は、孟子的な孝悌を否認し、家父長制を支える徳としての孝慈を支持した。孟子が家の背後に族を想定し周の封建制度に立脚したのに對して、老子は家族を什佰に組織する鄉村を支配機構の末端とする郡縣的體制を支持、家父長制に立脚した。ここに族本位・宗族内長者への（故に實父に對して妨げられた）孝である「孝悌」と、家本位・家族内家長への孝である「孝慈」との對立が見られる。孟子・老子に續く時代、これらの二重性を有する孝は様々な形で改變され、現實に對應させられてゆく。まず、『孝經』の孝は、封建勢力・宗族を支えるものでありながら、

君主の一元的支配を可能とするよう改變されている。そこで言われる孝は天子・諸侯・卿大夫・士・庶人がそれぞれ自己の地位身分を保つことを意味し、地位身分は先王・天子の制定したものだから、孝の實踐は結局君主の定めた地位を守ることになる。故に孝が充實するほど、人々は分をよく守り、より良く君主の一元的支配を可能ならしめる。このようにして父の權威は相對化され、孝は觀念化・抽象化され本來實踐されるべき場所を越えて適用されてゆく。このような論理により、天性としての孝によって政治を行うことこそ容易な支配の成就への道とされ、人道としての孝と天道の一體化が成し遂げられた。また『韓非子』忠孝篇には、君と父即ち忠と孝を對立・矛盾しないものとし、忠の下に孝、君の下に父を位置付け、法になかった道德性を肯定する思想が見出される。このことが可能となるのは、忠孝篇の言う父が宗族の長ではなく家父長だったからと思われる。戰國末く秦漢にかけて封建制度とその基盤をなす宗族の秩序が弛緩してゆく過程で、君權一元化に即應する様々な思想の展開が見られるが、忠孝篇はそれの中でも家父長制における孝の意義・役割を確認したものであり、そこに見える孝は、君主の一元的支配と對立しない、老子の孝慈に連なるものである。

これらの思想が生み出される中、封建制度を克服し郡縣制度に立つて成立した漢帝國では、孝の役割を政治の場から排除できず、宗族を打破しきることでもできなかった。漢の君主・官僚・庶民は、家父長制に立ちながら未だ族の弊害を除去し得ず、宗族遺制はそれらの周邊に固定化し、その中で豪族が擡頭、武帝頃から豪族を基盤とする官僚が増大し、法一元の支配も儒家的な孝によって補われることが増えていった。元・成帝期には儒家的官僚が君主をして禮を

履行せしめることが始まり、やがて君主を含めた社會全體が服するものとしての儒教の成立に到る。このような過程は、宗族本位の孝が、家父長制本位の孝との摩擦を経て君主一元の支配を可能とする孝へと改變され、結果として『孝經』的孝を基本とする教義が君主を含めた全人間界の教義となるに至った過程と把握される。

以上、本論文は二つの異質な孝觀念相互の摩擦・影響を通じて漢帝國の支配原理、また國家宗教としての儒教の成立までを展望した雄篇であり、板野氏の先の二著にも直接連なるものである。「中國古代の帝王思想」で基本的な輪郭が示され、「司馬遷の經濟思想」でその行き着くところを提示された、王道・霸道の二系統による中國古代思想史把握は、この「戰國秦漢における孝の二重性」で政治的過程との關連を含めた明確な筋道を與えられ、大著『中國古代における人間觀の展開』へつながってゆくのである。

四

本書の中間部に收められた三篇は一九八〇年代の作品であり、本書の「あとがき」によれば、板野氏の古代思想研究の到達點を示すものである。

「秦誓の作成」では、東周期における秦權力正當化工作の存在が明らかにされる。「秦誓」と『左傳』僖公三十三條の穆公の告諭、『史記』秦本紀穆公三十三・三六年條は、共通の題材を扱いながら相互に食違ひが見られる。「秦誓」と『左傳』では告諭の時と動機は一致しているが内容が異なり、『左傳』は「秦誓」あるいはその原本とみられる穆公の誓を認めていない。これに對し『史記』は、全體としては『左傳』に取材しながら穆公の誓をも眞實とみて採用

している。これは『左傳』作者が、王者の言辭としての形式・内容を持つ穆公の誓を秦にふさわしくないものと考えたのに對し、『史記』の項には「秦誓」が既に『尚書』に定着しており、これに對して批判的にはなり難かったことを示す。そして王者の言たる『尚書』に秦の穆公の誓が含まれるようになったことは、その背後に秦の權力者を王たらしめんとする工作があったこと、即ち秦誓は作爲されたものでありそれは秦權力正當化工作の一環であつたことを示している。秦權力正當化工作は既に襄公期には存在が知られ、靈公頃には周の史官系統の者（『尚書』の作成において指導的役割にあつた）の直接間接の指導によつていたらしい。獻公期には周の太史儋が獻公に讒言を傳えており、そこでは孝公・惠文王が王となることが豫言されているが、秦誓はおそらく獻公により、秦權力正當化工作の一環として讒言の降る前提として作成されたものである。これによつて穆公が王者たり得る者であることが證明され、孝公は秦誓とそれに應じて降された讒言とにより、穆公の業を次ぎ霸道・強國の術を遂行すれば霸・王となり得るとの確信を抱くことができたのである。

「管仲の參國伍鄙の制を論じて商鞅の縣の制に及ぶ」は、霸道の系譜を管仲と商鞅を中心に追う。管仲の參國伍鄙の制は、五家よりなる宗族の最小單位を社會構成の基本と見てそれを軌とし、その上に宗族集團としての鄉村共同體を置き、宗族を母體とする封建勢力の抵抗を受けることなくその制度を成功させようと目論むものであつた。しかし軌・里・連・鄉等の長は、族長の擬制であると同時に官僚的性格を有し、參國伍鄙の制は鄉村共同體を官によつて支配する機構であつたと言える。商鞅の縣制においては士庶の別・四民別

居の原則が解消され、民は力役奉仕の民に一元化された。また官吏の支配力が強化され、その上で法による信賞必罰を以て君主の強制が行われた。このような制度は、參國伍鄙の制を君主の一元的支配の方向により強化したものである。しかし同時にそれは宗族制社會に立ち軌・伍を基礎とし、周封建制の枠内に止まってそれを内部的に再編成したものであつた。またこの變法は襄公以來の秦權力正當化工作の一段階をなすものでもあつた。

「商鞅の變法を續る老子と孟子」は、前章の續篇とも言うべきもので、商鞅變法以後の思想界の動きを復元する。變法の成功を周の史官は當初承認しており、秦がそこからさらに王に進むことを期待していた。ところが秦の富國強兵政策は改まらず、商鞅車裂以後も基本的政策は繼承された。また孟子は商鞅を車裂した秦の宗室・貴戚等の勢力を國外から支持、變法を理解・支持した史官をも排撃した。ここに至り史官の側から商鞅陣營・孟子らに警告を發する者が現れたが、この史官の警告及びこれを契機として展開された論争の過程で史官の側が行つた應酬・解説の類によつて『老子』は構成されておられ、老子とはこの史官であつたと考えられる。老子は人道としての王道・霸道を排して天道・帝道に歸れと主張したが、この警告に對して商鞅陣營では、變法こそ天道・帝道の實現の方法であると對應、變法を天道により理論附ける者が現れ、それらは韓非に代表される法家の理論へとつながっていった。また孟子は、天道に人道を從屬させる方向を探り、人道を擴充して天道に到達すべしとして、人間の自主性を天の中に解消する立場から王道を體系化、道統を構築することになった。このように、『老子』の原作者たる史官の説は、以後の思想界に大きな影響を及ぼした。

以上、八〇年代に發表された三論文においては、秦權力正當化工作がクローズ・アップされ、諸子の思想に關する分析の力點も、政治過程との關係により強く置かれるようになったようである。秦を正當化するための「工作」が存在したこと自體は、戰國政治史・思想史の構築にあたり重要な論點として成立し得るだろう。商鞅變法あるいはそれを含む秦の政治方針が必ずしも宗族制社會を破壊するものではなかったとする點も興味深かった。またこの時期、「あとがき」でもふれられているように、板野氏は殷周交替期以來の思想史を強く意識しておられたようである（例えば一二九—一三三頁、一四一—一四四頁）。おそらく氏は、殷周交替期こそ中國思想の眞の成立期とする構想を持っておられたのであろう—その構想自體は『中國古代における人間觀の展開』でも萌芽的に見出される—と評者は推測しているが、とすればそのような立場からの通史的な著作が發表されることがなかったのは、まことに残念なことと言わざるを得ない。

ただ、この時期の板野氏の論文には評者には十分に納得できないところも多かった。例えば氏は、商君が四度孝公に謁見しその度に帝道・王道・霸道・強國の術を説いたという説話を、周の太史儋が獻公に傳えた讒言を前提として理解し、それらの史實性をほぼ全面的に承認するようである。しかし、商君入秦説話は全てを史實と見るよりは何らかの變形・脚色を含むと考えるほうが妥當だろうし、太史儋の讒言にしてもその史料的人格には問題があるだろう。また諸事象の背後に周の史官の存在を見るのも、根據が十分でないように感じられた。「商鞅の變法を繞る老子と孟子」での、老子の言を商君・孟子陣營への反撃とする見方や、商君書・孟子の言葉をそれ

への對應として讀み解いてゆく手法も、現在に傳わる先秦文獻がそのごく一部でしかないこと、また近年續々と未知の史料が発見されていることを想起すると、いささか深読みしすぎという印象を拭えないのである。戰國諸子の説は、確かに個別事象への對應から生まれてくる面を持つのであろうけれども、同時にそれらは一種の理想的世界・國家像を描いた極めて觀念的な構築物という面を持つのであり、必ずしも現實の政治過程や論争過程に全てをあてはめて理解すべきものではないと評者は考える。

五

西周初期に確立した封建制と、そこから生まれてくる王道・霸道の系譜。封建制を克服しようとして現れる郡縣制と家父長制。そしてそれらを根底において規定し、統一國家成立後も完全には拂拭されることのない宗族制・族的秩序。これらの基本的枠組を驅使して展開される板野氏の思想史は、長いタイムスパンと大きなスケールを持つ、學ぶべきところのきわめて多いものと言わねばならない。もちろん、本書收録の諸論文は、新しいものでも十五年以上、古いものは半世紀以上前に發表されたものであり、現在の研究状況からすれば、個別論文の實證的論點に批判・再検討されるべき論點が散見するのは當然である。むしろ板野氏の凄味は、テキストを構造的に強固な一貫性を持つものとして提示し、またそれらを簡潔に系譜的に整理して政治・社會的過程に對應させる、その力業と全體的な構想にこそあるのであり、我々は本書收録の諸論文でその分析の切れ味を存分に味わい、學ぶことができるのである。

ただし現段階では、氏の展望に従うには若干の留保が必要であ

る。

氏の論は、漢の君主・官僚・庶民が「家父長制に立」つこと、當時の思想史が宗族的秩序に立つものと家父長制的秩序に立つものと
の對抗・影響關係によつて展開すること、等を前提として成り立
ているのであるが、その前提となる「宗族制」「家父長制」の具體
的な在り方や、中國古代史を論じる際のそれらの概念の有效性自體
が現在では問われるべきであらう。本書に見える封建制・家父長
制・宗族制等の語は、評者にはいささか圖式的に使用されすぎてい
るように感じられる場合が多かった。しかしこれらは、現在でも十
分には議論の進展していない未解決の問題であり、特に春秋以前の
より血縁的であつたとされる社會の具體像については、未だ研究者
間に共通のイメージは確立されていないと見たほうがよいのかもし
れない。これらの概念裝置を鍛え直してゆくことは、後進に残され
た課題と言ふべきなのであらう。

西嶋定生氏の爵制的秩序のモデルに典型的に示されているよう
に、いわゆる秦漢帝國論の論争史は、支配の論理に基づく（あるい
は國家の論理と社會の論理の相互關係に基づく）⁽²⁾ 理念的モデルの構
築史という一面を持つと評者は考へている。しかしそこにおける學
說史は思想史研究の成果とリンクすることは少なく、思想・觀念の
歴史に關する諸研究を歴史像のレベルで學說史的に整理する試みも
未だ十分とは思われない。中國古代史を、人間の頭の中で展開され
る、觀念・世界觀のレベルを包含して再構成するという課題は、そ
の現状把握の面も含めて全く未完成である。

そのような課題の前でおそらく鍵となる研究の一つが、本書をは
じめとする板野氏の一連の著作なのであり、またそれは、古代中國

國家の統治理念などの問題を再考する上でも重要な示唆を與えるは
ずである。歴史學の中に板野長八氏の仕事をどのように位置附けど
う乗り越えてゆくか、これらも今後に残された課題である。

註

(1) 木村英一『法家思想の研究』（弘文堂、一九四四）第三章
第二節では、この説話を「本來商君の事蹟でなかったもの
が、後から商君に假託して說かれるか、或は本來商鞅の事蹟
で、種々潤色し變形して語られた可能性の多いもの」の中に
擧げる。

(2) 西嶋定生『中國古代帝國の形成と構造——二十等爵制の研
究——』（東京大學出版會、一九六一）。なお評者は、かつて
これらの學說史について不十分ながら若干の整理を試みたこ
とがある。柴田昇「戰國史研究の視角——諸子百家と戰國時代
の「國」をめぐる——」（『名古屋大學東洋史研究報告』一
八、一九九四）。

二〇〇〇年一月 東京 研文出版
A5判 三六八頁 八〇〇〇圓